

京都大學經濟學會

經濟論叢

第六十五卷 第四・五號

原價の本質……………岡部利良

ルソー「經濟論」について……………河野健二

抽象的勞働に關する若干の問題……………吉村達次

經營經濟學に於ける經濟性概念について……………降旗武彦

昭和二十五年五月

抽象的勞働に關する若干の問題

吉 村 達 次

この小稿において私は戦後マルクス價值論研究に多くの業績を發表されている遊部氏によつて、最近發表された「抽象的勞働」に關する論文（「價值論争史」第三章として収録されている）について、若干の批判を試み、私の本問題に對する理解を深める第一歩としたいと考ふるにすぎない。「抽象的勞働」の問題がマルクス價值論においてしめる重要性、その今日の問題としての意義については、今さらいう迄もないであらう。しかしこの困難な問題に對して自らの積極的見解を示すことは到底まだ私の力の及ぶところではなく、従つて小稿も遊部氏の見解の全面的批判を試みんとするものではなく、唯私の疑問を提起し且その解決への手掛りを模索したにすぎない。

一 遊部氏による問題の提起と展開

抽象的勞働に關するこれ迄の通俗的見解は、勞働生産物からそれに對象化された勞働の具體的有用的勞働を捨象するならば抽象的勞働だけが残り、それが價值の實體をなす、というにとどまつた。これに對して遊部氏は先ず疑問を提出され、抽象的勞働の理解にとつて重要なのは、商品價值の實體が抽象的勞働であるという點にあるのではなく、抽象的勞働が如何にして價值という形態をとるか、という點にあり、前の命題が明かにされたとし

ても、それだけでたゞちに後の問題の解決とはならない、とされ、そこからして、氏にあつては必然的に、抽象的労働は「それ自體のうちにもそれをして價值へと生成せしめる契機を見出し」得るようなものとして把握されなければならぬ。そこで「如何なる抽象的労働の觀念よりすれば、價值形態を導き出し得るか」を探究することが氏の當面の問題となる。

次いで氏は、抽象的労働の種々なる側面を一つ一つ観察されてゆく。

(1) 先づマルクスから次の引用をされる「こゝに抽象的労働というのは、上衣に含まれた労働の、規定された有用な具象的な特性が捨象されるからであり、人間的な労働というのは労働は、茲では人間的な労働力一般の支出としてのみ資格をもつからである。」^(註)そしてこのように規定された限りの抽象的労働の觀念は「生理學的意味での人間的労働力の支出」として、「あくまで人間の頭の中で抽象化された」觀念であつて、歴史的觀念というよりも自然的觀念である。商品とかがぎらず、あらゆる労働生産物に支出された労働はこの一面をもつてゐる。だからこの規定は「いわゞ一個の理論的規定」にとゞまるとなし、それを抽象的労働の範疇規定と呼ばれる。したがつて上述の如く問題を提起された遊部氏にとつてこのような規定にとゞまり得ないことは當然である。

(2) 抽象的労働の理論的規定を不充分とする氏は次いで現實の中にもそのあるがまゝの姿において實存する抽象的労働を探求される。マルクスが簡單労働と複雑労働について述べた一文の中、「かゝる一般的人間的労働という捨象物は、所要の社會のすべての平均的個人がなし得る平均労働——人間の筋肉・神經・腦髓等々のある一定の生産的支出——において實存する、(existent)。「誰の」^(註)という一句を論據として、こゝにおいては「抽象的労働は生理學的等質労働としてみとめられつゝ、しかもかゝるものとして現實のブルジョア社會に實存することが指摘さ

れている。」とされる。

その意味は氏によれば、ブルジョア社會においては生産過程に機械が採用され、その普及發達と共に労働は簡單化され、諸労働の自由なる轉換が可能となる。生産過程における簡單労働の普遍化こそ、労働が生産過程において現實に抽象化されていることを示すものであり、「されば抽象的労働の成立、換言すれば労働の抽象化は生産過程において行われるのである」(以下すべての引用文の傍點は引用者のもの)かゝる意味において抽象的労働はすぐれてブルジョアの規定であり、これを對象的實存規定といわれる。そしてこの規定の意義を次の如く強調される。「すなわち機械的工場内部において最高度に具象的に發展した労働の一面としての抽象的労働、かゝる限定された抽象的労働であつてはじめてそれは價值法則の基柢たりうるのである。」と。

さらに氏は資本主義における簡單労働の廣汎な成立、及び自由なる労働市場の成立を前提とする労働の形態變換の自由から生ずるところの、「労働の一定種類に對する無關心」をあげ、抽象的労働は「人間の意識の上に感性的にも」實存するとされる。

氏によれば、この實存規定は抽象的労働のすぐれて資本主義的性格を指適し、ひいてはマルクスの簡單な商品の價值規定(いわゆる價值論)の本來の資本制的性格を明らかにしている點において、單なる範疇規定より秀れているが、なお抽象的労働の價值化の契機を抽象的労働自身の固有の、内在的性質のうちに見出していない點、換言すれば商品—資本制經濟とゆう社會的—歴史的條件が抽象的労働そのものうちに構成的に入つてきていない點において、結局『なぜ抽象的労働が價值となるか』という最初の問題に答え得ない點において、なお不充分を脱れな。

(3) さていよ／＼氏は本論文の主眼點たる「抽象的労働をして價值たらしめるものは何か、」を探索するのであるが、氏はその解決は商品の物神的性格の闡明によつて與えられるものとする。ところで商品の物神的性格は商品を生産する労働の獨自的社會的な性格から生ずるのであるから、それを明かならしめることによつて價值の實體となる抽象的労働の獨自の性格も従つて明かとなる。次いでマルクスに従つて商品を生産する労働の獨自的社會的の性格を述べ、抽象的労働が社會的労働として果す役割を指摘し、それによつて始めて商品の交換従つて價值の實現は可能となるのであり、従つてそれは商品交換の基柢となる。こゝにおいて氏は「抽象的労働をして價值たらしめる根據を、商品生産者の労働そのものうちに見出」されるのである。

次いで抽象的労働と價值實現との關聯が問題とされる。抽象的労働は生産過程で成立するがそれは直ちに價值の成立を意味しない。抽象的労働が同時に價值の成立であるためには、あらかじめ交換⇨流通過程における價值の實現が前提されなくてはならない。従つて價值の成立は、流通過程と相互規定的關係にある生産過程においてのみ認められるのであつて、直接的生産過程のみを切り離しては價值の成立は不可能である。そこで、「諸商品の直接的生産過程に成立せる抽象的労働が價值という形をとりうる（價值の成立―筆者）のは、諸商品がそれらの生産に投ぜられた労働の抽象的労働という一面を基軸にして、流通過程において交換されうるからであり、こゝに價值の實現がみられることによつて、」である。従つて抽象的労働の價值化は商品經濟（交換⇨流通過程）なしには不可能である。かくして氏は抽象的労働の價值化（價值の成立）の契機を抽象的労働の外部にはなくその内部に見出しうるに至つたとされ、この意味での抽象的労働の歴史的社會的の性格（すなわち商品經濟を媒介契機として始めて價值化しうるというその性質）を實現規定と呼ばれる。

(4) 最後にこれら三つの規定が資本主義社會において完全に確立し、成立し、その内面的なつながりをもつことを強調される。

以上遊部氏の論旨の概要をその敘述を追つて稍詳細に述べたが、それによつて明かな如く、氏は抽象的勞働の規定性を三つに分け、その區別と内面的連繫を綿密に追求するとゆう形式をとつて議論を展開されているのであるが、それにも拘らずそれらの區別と連繫は必ずしも明瞭ではない。以下その一々について検討を試みよう。

二 マルクスによる抽象的人間の勞働の抽出過程

「生理學的意味での人間の勞働力の支出」を遊部氏は抽象的勞働の範疇規定とされていることは上に述べた如くであるが、それに照應して資本論第一卷第一章第一節「商品の二要因」及び第二節「商品で表示される勞働の二重性格」においては、抽象的勞働の規定はこのような範疇規定の範圍を出ないものとされている。ところがそのすぐあとで第二節で取扱はれる簡單勞働の敘述において、氏の所謂實存規定の手掛りを見出しておられる。これは、一見何でもなす誤りのようであるが、しかしそれは氏によつて範疇規定及實存規定と呼ばれているものに對する獨特の理解と深くつながつてをり、必ずしも偶然的な誤りとはいえない。上述の如く氏はマルクスが第一節において交換價值から導き出して來た抽象的人間の勞働の規定をもつて單に人間の頭の中で抽象された理論的規定にすぎないとされる以上は、必然的に第二節をも含めて範疇規定とせざるを得ないのはむしろ當然であるが、その結果はまた範疇規定と實存規定との區別と連繫の不明瞭さをももたらしている。

そこで先づマルクスが抽象的人間の勞働を價値の實體として導き出して來た過程をふりかえつて見よう。マル

クヌは「資本論」において我々の感性にあらわれるがまゝの商品から出發して「第三の共有物」の發見に至る迄の過程を、「ワグナーの『經濟學教科書』への評註」において自ら要約して次の如く云つてゐる。「事實あらゆる相場表において、各個の商品種類は、自らを財、使用價值として、綿花・糸・鐵・穀物・等々として、他者から區別し、他者とは凡ゆる點で質的に異なる『財』として自らを表示しながら、しかも同時に自己の價格をば、質的には同一でも量的に異なる同一本質のものとして表示するとゆう、非論理的な過程をとるのである。各個の商品種類は、それを使用するものにとつてはそれの自然的形態において自らを表示し、また、それ〔自然的形態〕とは全く異なつて、その商品と凡ゆる他の商品とに共通な價值形態において、ならびに交換價值として、自らを表示する。要するにすなわちあらゆる相場表において集約的に表現されてゐるところの幾百萬回となく繰返される交換の大量的現象のうち既に商品生産における人と人との關係が我々の眼には物と物との社會的關係としてあらわれるとゆうことの矛盾が暴露せざるを得ない。しからばこの「質的には同一でも量的には異なる同一本質のもの」或いは「使用價值の一片をもふくまない第三の共通物」の實體は何であるか。マルクス及びレーニンにその説明を求めよう。

「諸々の使用價值は直接に生活資料である。だが逆に、かゝる生活資料そのものは、社會的、生活の生産物であり、人間の生命力の支出された結果であり、對象化された勞働である。すべての商品は、社會的勞働の體化物として、同一の統一物の結晶である。かゝる統一物の、すなわち交換價值でみづからを表示する勞働の、規定された性格が、いまや觀察さるべきである。」(經濟學批判) 第四

「使用對象あるいは財としては、諸商品は物體的に異なる物である。これに反してそれらの價值存在はそれら

の統一を形成する。この統一は自然からではなく、社會から生れる(entspringen aus)。種々な使用價值でたゞ色々に自らを表示するところの、その共通な社會的實體は、勞働である。」(資本論初版) 註(五)

「それらが有する相互に共通なものは、それらが勞働生産物であるというところ、これである。人々は彼等の諸生産物を交換することによつて極めて相異なる種類の勞働を相互に等置する。商品生産は、そのもつて個々の生産者たちが種々の種類の生産物を生み出し(社會的分業)且これら一切の生産物が交換に際して相互に等置されるところの、社會的諸關係の一體制である。だから(ergo)、すべての商品に含まれている共通なものは、ある一定の生産部門の具體的勞働ではなく、一定の性格をもつ勞働ではなくて、抽象的・人間的勞働、人間的勞働それ自體である。」(レーニン「カール・マルクス」) 註(六)

これらの引用を比較對照するならば、經濟學批判よりの引用における「社會的生活」「社會的勞働」、資本論初版における「社會から」「社會的實體」とゆう場合の「社會」が何らか不特定の社會一般を指すものではなく、レーニンが明瞭に指示しているごとく、社會的分業と私的占有に基く社會的諸關係の一體制としての商品生産社會であることは明瞭である。そうだとするならば「この統一は自然からではなく、社會から生ずる。」とゆう場合マルクスはこの独自の一體制としての商品生産社會から生ずるとゆうことを指摘しているのであり、またレーニンが「だから……共通なものは……具體勞働ではなく……抽象的人間的勞働である……。」という意味は、社會が商品生産であるから共通なものは抽象的人間的勞働だとゆうことである。要するに「第三の共通物」なるものは商品生産社會から生ずるところの抽象的・人間的勞働であるというところがこれらの文章の中で云われているものと理解してよい。しかしこれを機械的に(ルービン流に)解釋してはならないのであつて、そのためにはこの「生ず

る」とゆう意味を今少し詳細に検討する必要がある。それは、レーニンが前掲の文章のすぐあとで、マルクスから次の一句を引用していることに注目すればよい。「彼等は、彼等の種々の種類の諸生産物を交換において諸價值として相互に等置することにより、彼等の種々の諸労働を人間的労働として相互に等置する。彼等はそれを意識してはいないが、しかし彼等はかく行うのである。」(註七)すなわち商品生産者たちは無意識的に自己の交換行為において諸労働を人間的労働として相互に等置するのである。この無意識的行為なるものをマルクスの言葉を通じてさらに展開しよう。

「直接的な生産物交換は、一面では簡単な價值表現の形態をもち、他面ではまだこれをもたない。かの形態は $X \text{ 商品 } A = Y \text{ 商品 } B$ であつた。直接的な生産物交換の形態は $X \text{ 商品 } A = Y \text{ 商品 } B$ である。AおよびBなる物は、こゝでは、交換以前には商品ではなくて、交換によつて始めて商品となる。ある使用對象が可能性から云つて交換價值である第一様式は、非使用價值としての、その所有者の直接的慾望を超過する分量の使用價值としての、その使用對象の定在である。この譲渡が相互的であるためには、人々はたゞ黙つて、かの譲渡される諸物の私的所有者として、また正にそれゆゑに相互に獨立せる人格として、對應し合ひさえすればよい。しかし、かゝる相互に他人たる關係は、自然發生的な共同體の諸成員にとつては……實存しない。商品交換は諸共同體の終るところで……始まる。……それらの物の量的な交換關係は、最初には全く偶然的である。それらの物が交換されるものであるのは、それらを相互に譲渡しあふうとする、それらの物の所有者たちの意志行為によつてである。かれこれするうちに、他人の諸使用對象に對する慾望が次第に確立される。交換の絶えざる復讐は、それを一の規則正しい社會的過程たらしめる。だから時の経過につれて、諸労働生産物の少くとも一部分は、

意圖的に交換の目的で生産されざるをえない。この瞬間から、一方では、直接的要求に對する諸物の有用性と、交換のための諸物の有用性との間の分離が確立する。諸物の使用價値は、それらの物の交換價値から分離する。他方では、それらの物が交換される量的關係は、それらの生産そのものに依存するようになる。慣習は、それらの物を、價値の大いさとして固定させる。」(註八)

こゝに直接的物々交換から商品交換の確立に到る迄の過程に照應して商品生産者の自己意識と「無意識的行爲」との關聯の發展が見事に述べられている。すなわち最初の直接的な生産物交換においては、商品生産者は自己にとつて非使用價値である生産物の私的所有者としてのみあらわれる。勿論それは使用價値を交換價値たらしめる可能性を與える第一條件であるが、それのみをもつてしては交換はなお私的所有者の個人的な意志にのみもつて偶然的行爲にすぎない。單なる量としてさへも價値はこれらの交換の規準とはなり得ないし、彼等の意識にも當然のぼつてこない。しかるに社會的分業が發達し彼等の相互依存關係が緊密となるにつれて、私的所有との矛盾は増大し、その矛盾の一時的解決としての交換は益々頻繁となり、私的所有者の存立の一條件となるにつれてそれはもはや彼の個人的意志を越えた社會的過程となる。こゝにおいて始めて量の觀念は確立し、交換比率の問題は重要な關心事となる。だがなお價値が何にもとづくかは彼等は意識しない。交換が規則的なものとなるにつれて、商品の生産もまた規則的にならざるを得ない。かくて生産物が最初から交換の目的で生産されるようになると、商品の生産過程は商品生産者自身にとつては交換價値の生産としてのみ意義をもち使用價値の生産としては他人のための使用價値の生産にすぎないところの特殊な生産過程たることが明瞭となる。他方では今まで流通過程に依存するかに見えた交換比率が、生産そのもの、すなわちその生産に必要な勞働の分量に依存するよう

なり、それと共に生産物は始めから一定の價值の大きさをもつものとしてあらわれる。かくて最初無意識的に諸労働を人間的労働として等置した商品生産者たちは、彼等が意識的に交換目的のために生産を行うに到つて、彼等は自己の労働そのものにおいて使用價值をつくる労働と價值をつくる労働を截然と區別し、彼の労働の量が價值の量を規定することを明瞭に意識し、少くとも彼等の生産過程内部に對しては、何が商品の使用價值をつくり何が交換價值をつくるか、を實踐的に自覺するようになる。この間の事情をエンゲルスは資本論第三卷補遺において次の如く例解してゐる。

「農民も、農民に賣つた人々も、みづから労働者〔直接的生産者〕であり、交換された財貨は各人の自己生産物であつた。これらの生産物の製造に彼等は何を充用したか？ 労働であり、労働のみである。道具の填補のためにも、原料を作るためにも、原料を加工するためにも、彼等は、自分自身の労働力以外には何も支出しなかつた。だから、彼等は、彼等のかゝる生産物を他の労働しつゝある生産者たちの生産物と交換するにあたり、これらの生産物に費された労働時間に比例する仕方以外の仕方が、どうして採れようか？ この場合には、これらの生産物に費された労働時間が、交換さるべき、大いさの量的規定のための唯一の適當な度量基準であつたばかりではない。この場合には總じてそれ以外の基準はあり得なかつたのだ。」註九

だがしかし如何にして労働が價值となるか、或いは價值形態をとらざるを得ないか、その理由はもとより彼等のさるところではない。彼等はたゞ價值を生産しなければならぬ、そして價值は労働によつて規制されるとゆうことを自覺するにすぎない。彼等が社会的分業と私的所有とゆう特殊な歴史的・社会的關係の中にあり、彼等の相互依存と排他的傾向との矛盾が存する限り、従つて彼等の矛盾の一時的解決が交換過程に依存せざるを得

ない限り、そのことは不可能である。すなわち彼等の労働の特殊な社会的性格の理解が必要なのであり、彼等自身の存在の歴史的過渡的性質の自覚が必要である。しかしそれは彼等にとつて不可能事に屈するものであり、またかりに理解し得たとしても彼等が依然同じ歴史的存在を続ける限り、労働が価値としてあらわれざるを得ないという事實を如何ともすることが出来ないことは勿論である。かくて価値法則は彼等に重力の法則の如く作用するのである。このような彼等の無意識性と意識性との對立は、實は商品生産の基本的一般の矛盾、生産の社会的性質と占有の私的性質の矛盾の發現に外ならない。

以上不十分なから商品生産社會固有の矛盾が生産を直接交換の目的に従屬せしめるに到つて、個々の直接的生産過程の内部においても労働の有用的性格と抽象的人間的性格とが實踐的に區別せられると共に、使用価値に結果するものは有用的労働であり、価値に結果するものは抽象的・人間の労働であるということが意識されるに到ることを述べた。

マルクスの「云う「社會から生ずる」と云う意味もこのように理解されるべきものと考へられる。資本論において「さて諸商品の使用価値を度外視すれば、それらになお残るものは、一の屬性、すなわち諸労働の生産物だとういう屬性だけである。……諸労働生産物の有用的性格と共に、諸労働生産物で表示されている諸労働の有用的な性格が消失し、かくして、これらの労働の種々なる具體的諸形態も消失して、それらはもはや互に區別がなくなり、悉くが、同等な、人間の労働すなわち、抽象的・人間の労働に還元されている。」¹ 兼じとゆうように抽象化が進められるのも、單に理論的分析ではなくして、上述の如き意味がふくまれているものと解すべきであらう。このような過程を前提してこそ、労働が一般に如何なる社會においても有するところの具象的側面と一般的側面が、二者闘争的

なものとしてみられるのであり、かゝるものとして規定された労働が始めて經濟學の對象となるのである。第二節の表題が單に労働の二重性ではなく「商品に表示された労働の二重性」とされている點を見るべきである。

このように見て來るならば、「さて吾々は、諸労働生産物の右の残りものを考察しよう。……云々」から「……これらの物は、それらに共通なかゝる社會的實體（人間の労働）の結晶としては、諸價值——諸商品價值である」（註十）とゆう一句を、遊部氏の如く「こゝでは抽象的労働が價值であると確認されているだけである。より詳しくは價值を交換價值から分析してみせて、それが抽象的労働であることを確立しているといふべきであろう。」と簡單に片附けられるものではない。勿論「何故、如何にして抽象的労働が價值になるか」は依然として不明であるが、しかしその抽象のプロセスを立入つて見るならば、すでに抽象的労働としての労働の規定性が「社會から生ずる」ものなることが前提されているのである。だからして、この一句だけを切り離して見るならば、抽象的労働は氏のいわゆる單なる範疇規定と見ることも出来るが、しかし分析の過程において範疇そのものゝ生成過程が社會から生ずるものとして考えられる以上、單に理論的抽象化の産物たる生理學的範疇規定とはいへ得ない。我々の經濟學の出發點が單なる富ではなく經濟的具體物たる商品であつた如く、使用價值がまた單なる使用價值ではなく、商品の一契機としての、社會の規定性における使用價值であつた如く、抽象的労働もまた最初から社會の規定性における「抽象的労働」が與えられているものといわねばならない。しかしなおそのより立入つた内容及びそれが如何にして價值となるかはまだ明かにされてをらない。

三 抽象的労働の内容

先に少し觸れたようにマルクスによる労働の二重性の分析は、人類の發生と共に古い労働の具象的・一般的性質をのべたものではなく、商品において表示された限りでの労働の二重性が、すなわち單に使用価値ではなく社會的使用価値に結果するものとしての具體的・有用的労働の性質と、價值に結果する限りでの抽象的・人間的労働が分析されているのである。具體的有用的労働は先ずその目的、作業様式、對象、手段、およびその結果によつて規定されるものとして、その總體が一個の社會的分業を形成し、個々の労働はその一肢體たるが如き労働とされる。しかし労働が直接的生産において活動する限りにおいては自然そのものと同じようにしか振舞い得ないもので、それが社會的分業の自立的な環たる實をしめすか否かによつては何ら變更を被らない。その意味では社會形態の如何を問はず人間の實存條件でもある。こゝにすでに社會的分業を基礎とする商品生産社會における有用的労働と單なる有用的労働との同一性と區別が語られている。次に抽象的・人間的労働についていえば、次の一句にそのことは明瞭に語られている。

「價值としては、上衣と亞麻布とは、同等な實體からなる物であり、同等な種類の労働の客觀的な表現である。しかし、裁縫業と織物業とは質的に異なる労働である。……………或る社會狀態のもとでは、……………。これら二つの労働様式は同じ個人の労働の變化にすぎず、まだ、異つた個々人の特殊的な固定的職分とはなつていないのであつて、それは恰も、我々の裁縫師の今日作る上衣と明日作るズボンとが同じ個人の労働の變化を前提するにすぎぬのと、まったく同じ譯合である。さらに、一見すれば分かることだが、吾々の資本主義社會では、労働の需要の方向が變るにつれて、人間の労働の或る與えられた部分が、こも／＼あるいは裁縫師業の形態で、あるいは織物業の形態で、供給される。労働のかゝる形態變換は摩擦なしに行われぬかも知れぬが、しかしそれは行わ

ればならぬ生産的活動の規定性、従つてまた勞働の有用的性格を度外視すれば、それに残るところは、それは人間の勞働力の支出だということである。裁縫業と織物業とは、質的に異なる生産的活動だとはいへ、いづれも人間の腦髓、筋肉、神經、手、等との生産的な支出であり、且つかゝる意味で、いづれも人間の勞働である。それらは人間の勞働力を支出するための二つの異つた形態に外ならない。(こゝまでにおいてはマルクスは人間の勞働力の支出としての人間の勞働が勞働そのものが常にもつてゐる性格の一面にすぎないことを述べてゐる。ところで問題は次にある――筆者も)もちろん、人間の勞働力そのものは、あれやこれやの形態で支出されるためには、多かれ少かれ發達しておらねばならぬ。しかし商品の價値は人間の勞働一般の支出を、表示する。いま、ブルジョア社會では、將軍とか銀行とかは大きな役割を演じ、たゞの人間はこれに反して極めて見すばらしい役割を演じてゐるのであるが、この場合の人間の勞働もまたそうである。それは、平均的に誰でも普通の人間が特殊的な發達をまたないで、その肉體のうちに有つてゐるところの、簡單な勞働力の支出である。」(註十三)

この後半の意味するところを少し具體的にすれば次の如くなるであらう。商品生産は社會的分業の一定の發達を條件とするのであるが、社會的分業はまた人間勞働力の多面的な、豊かな發達を條件とする。にも拘らず商品がその價値において表示するところの勞働は「人間の勞働それ自體」または「人間の勞働一般」であり、多面的な豊かに發達した勞働力ではなく、「簡單な勞働力の支出」である。即ち價値において表示される勞働は個々の個性的な勞働ではなく、それが一端社會的總勞働という全體の中に解消され、無差別に平均化され、一般化された勞働に還元されたのち、その可除的部分としてのみ價値の實體となる。(註十三) そうだとすれば商品の價値の實體をなす人間の勞働力は社會形態の如何を問はず直接的に實存する勞働の一面としての人間の勞働力ではない。

或いはまた商品生産社會においても個別的生産者の個別的労働力の支出がそのまゝ、價値の實體としての人間の労働ではない、とゆうことが明かとなるであろう。かくて價値の實體となる人間の労働力と、個々人の、或いは未發展の人間の労働力の區別と同一が考えられるのである。要するに商品に表示される労働の二重性は、絶對的規定性における労働の二重性ではなく、それ／＼社會的規定性をもつたものでなければならぬ。このような差違性を明確に前提しつゝ、しかもその同一性を明かにすること、それが第二節の眞の意味であると考へる。複雑労働の簡單労働への還元とゆうこともこのことを前提せずしては無意味であろう。あるがまゝのものとして現存する簡單労働とは、複雑労働との對立において具象的個別的に存在するのであり、そのまゝではもとより直ちに價値を形成する労働とはいへ得ない。しかし複雑労働を簡單労働に還元することは同時にすべての労働が複雑でも簡單でもない社會的平均に解消することであり、社會的總労働の可除的部分としての一般的な、人間のな、労働として價値を形成するものとなるのである。従つて個々の商品にふくまれた簡單労働は量的には事實上その商品の價値の實體としての一般的抽象的労働とは事實上一致しうるとしても、それがなお直接的に一般的社會的なものではなく、個別性の痕跡を残している以上なお質的に同一なるものとは云い得ない。

さて以上のことからして遊部氏が抽象的労働の對象的實在規定として、ブルジョア社會における簡單労働の廣汎な普及を挙げられることはそのこと自體間違ひではないが、そこから直ちに抽象的労働は生産過程において成立するものと結論されることは、安部隆一氏の場合の如く單純な意味でなくとも、技術主義におちいる可能性を脱れ得ないであろう。勿論エンゲルスの指摘する如く、機械工業においては労働は簡單化され事實上、労働の抽象化が行われるのであるが、しかしそれが眞に抽象的労働であるとゆうのは彼等が賃銀労働者であるとゆうことと

無關係ではない。技術的な意味では労働の簡單化は既に述べた如くそれが如何に普及したとしても、それを以つて直ちに抽象的労働ということは云うことが出来な

このような氏の技術主義的考へ方は氏によつて抽象的労働の「感性的實存規定」をいわれる「労働の一定種類に對する無關心」の理解においていよく濃厚にあらわれる。氏によればこの「無關心」は人間の意識の上に感性的に存在する」とゆうように非常に主觀的な規定があたえられてゐるのであるが、これは單に表現上の問題にとゞまつていないで、實はこの問題に對する氏の理解の仕方を最も特徴的に示している。もとより氏もまたこの「無關心」を封建制社會等における農民のそれと區別し、資本主義社會にのみ特有なものとされてゐるのであり、この限り何ら問題はないようであるが、そのすぐ次に、抽象的労働の對象的實存規定と感性的實存規定は二つながら、一定の條件の下では原始共產社會にも、また社會主義社會では資本主義社會におけるよりも「より完成したかたち」で存在すると考えられていることからすれば、「資本主義に固有する」という一見正しき規定も甚だ怪しいものとならざるを得ない。すなわち原始共產社會にあつては、その内部に兩性又は個々の集團の極端なる不平等が存在しないかぎり労働の自由なる轉換が可能であるから、「無關心」は存在するとされるが如き、甚だ了解に苦しむ見解は別としても、社會主義社會において技術の進化が資本主義より著しいから當然抽象的労働の實存規定たる簡單労働もより一層完成し、また労働の轉換はずつと容易になるから、労働の一定種類に對する無關心もより一層發展するといわれていることは、氏自身の「特定の社會關係」に對する無關心を暴露されたものといわざるを得ない。云う迄もなくマルクスの云う「労働の一定種類に對する無關心」とは根本的には生産が價値を目的として行われ、使用價値は「止むを得ざる惡」としてのみ生産されるという商品生産社會固有の矛盾か

ら生じ、それが資本主義社會における資本と賃労働との對立に發展するに及んで、普遍的な事實となるのである。それは資本主義社會が價值法則に支配されているということの盾の半面を言い表した事實に他ならない。しかるに社會主義社會においてもこのような事實が存するとされるのは、資本主義の根本的矛盾からくる無關心が、いつのまにか、單に労働の自由なる轉換の可能性にすりかえられているからである。労働の自由なる轉換は外見的には資本主義社會にも社會主義社會にも同様に存する如く見えるけれども、その動機たるや全く異なる。前者にあつては既に述べた如き社會の矛盾から生じ、それは一面自然からの人間の解放を意味すると共に、他方人間の自己疎外を意味し人間性の空疏化をもたらずのに對し、後者においては労働は人間の正常な生命活動たる意義をもつが故に、むしろ特定の労働への強い關心こそ、労働の自由な轉換を呼び起すのであり、そして社會主義的生産關係とその下における技術の發達がそれを可能ならしめ、眞の労働の自由が確立されるのである。このよ
うな「労働の自由なる轉換」のもつ特殊な歴史的社會的意味を完全に無視するところに遊部氏の見解は成り立っている。この社會構造の特殊性に對する無視は必然的に労働の自由な轉換即無關心という主觀的理解に氏を導くのであり、「人間の意識の上に感性的に存在する」という表現を偶然ならざるものとするのである。しかも問題はそれのみにとどまらない。氏が社會主義社會において労働の抽象化、抽象的労働の對象的實存規定のより一層の完成を見られるとき、上述の社會關係無視が再び繰返される。すなわち社會主義社會における労働の簡單化は、資本主義における如く抽象的労働の成立に物質的基礎を與えるものとしてではなく、むしろ人間の能力の多面的な、具體的な、全人格的な、發展をもたらず基礎となるのであり、簡單労働の社會的意義は全く異なるにも拘らず、それが無視され、一様に簡單労働―抽象労働の一角にゆりつぶされてしまう。その原因は何か。今度は前

の主觀主義とは反對に、最初に「すぐれてブルジョアの労働と」規定された簡單労働が大機械工業の必然的結果として、機械的にとらえられることによつて、氏が技術主義的誤謬におちいつていることに由來するのである。

しかればこれら二つの所謂「實存規定」の内容に對する主觀的或いは技術主義的理解の根本的原因はどこにあるか。上述のことからして既に社會構造若しくは生産關係の無視にあることは明かであろう。この點を今少し詳細に述べよう。氏が抽象的労働の實存規定に立入られる立脚點は、「抽象的労働の成立換言すれば労働の抽象化（商品の）は生産過程において行われる」というところにあつた。この命題自體としては極めて正しいのであるが、「他方機械制工場内部において最高度に具象的に發展した労働の一面としての抽象的労働、かゝる限定された抽象的労働であつてはじめてそれは價值法則の基抵たりるのである。」と結論され、その論據を經濟學批判の序言よりの次の引用におかれてゐる。「簡單な諸範疇は、より未發展な具體物が——具體的な範疇によつて精神的に表現されているより多面的な關係またはより多面的な關係をまだ定立することなしに、——自己を實現しているかもしれない諸關係の表現であると同時に、より發展した具體物は、同一の範疇を一つの從屬的關係として維持するのである。」及び「要するに、たとえより簡單な範疇は、歴史的には、より具體的なものに先だつて存在し得たとしても、その内包的および外延的の完全な發展においては、それはたゞ複雑な社會諸形態のみに屬しうるのである。」（註十四）

これらの文章から果して氏のような結論が必然的に出て來るだろうか。否マルクスの言葉は逆に氏の結論をくつがえしている。マルクスがこゝで云わんとするところは、抽象的労働という範疇は單純商品生産において既に發生したとしても、その完全な（概念は一致する）發展は資本主義的生産をまつて始めて可能であるとゆうことと

まらず、次の意味をもふくんでいる。商品生産は資本主義社会において始めて完全に發展し同時に商品なる範疇は資本主義經濟の最も一般的普遍的な範疇となるのであるが、他面資本主義經濟が抽象的なものから具體的なものへの發展の極點における最も具體的なものとするならば、最も一般的抽象的な範疇としての商品こそは具體物としての資本主義展開の理論的出發點たるものであり、それ自體の中に自己運動を通じて後者に發展せざるを得ないところの最も一般的な矛盾をその中に含むものといわねばならない。従つてまた商品の一契機としての抽象的勞働も單純な商品という限度内で商品が展開する諸矛盾の内に、自己の最も一般的な基本的な諸側面を展開する。だからこそより一層發展した形態たる資本主義的生產關係から切りはなして、しかもそこにおいて展開される諸矛盾を既に胚芽的に含むものとして、従つてまたその理論的歴史的前提として單純な商品をそれ自體として取扱う根據があるし、またその限り抽象的勞働をも單純商品のワク内で充分取扱うるのである。マルクスはこの事情を次の如く説明する。

「われわれがさきに觀察した經濟的諸範疇もやはり、それらの歴史的痕跡を帯びている。商品としての生産物の定在のうちには、一定の歴史的諸條件が含まれている。生産物は、商品となるためには、生産者自身のための直接的生活資料としてでなしに、生産されることを要する。われわれが更に運んで、いかなる事情の下に總べての乃至は少くとも大多數の生産物が商品の形態をとるかを研究したならば、それは一の全く獨特な、資本主義的な生産様式の基礎の上でのみ起るものであることを、見出すであらう。けれどもかかる研究は、商品の分析には縁遠いものであつた。生産物の壓倒的大量が直接に自家の需要に向けられて、商品に轉形されることなくとも、隨つて、社會的生產過程がまだまだその全體の廣さおよび深さにおいて交換價值によつて支配されることがなく

ても、商品生産と商品流通とは起り得る。生産物が商品として現われるには、直接的物々交換にその端を發する使用價值と交換價值との分裂がすでに完成されている程度に發展したところの、社會の内部における分業を條件とする。しかもかゝる發展段階は、歴史的には甚だしく異なる諸々の經濟的社會構造に共通するものである。」

註(十五)こゝにマルクスは商品の分析にとつては社會的分業と私的所有に基く商品生産という條件で充分であるとはつきりいつてるのであり、そしてこれら條件の總體を商品の社會的生產過程（生産過程と流通過程の統一）と呼んでいるのである。抽象的勞働分析にとつても従つてこれらの條件で充分であるし、また抽象的勞働の成立を商品の生産過程に見出すとする場合の生産過程の意味もかくの如く理解されなければならない。註(十)それは先にみた如き、商品生産固有の矛盾を包藏するところの直接的生產過程をその基礎とする社會的生產過程において抽象的勞働は客觀的に成立するのである。しかるに遊部氏は抽象的勞働の成立を直接的生產過程において現實にあるが、いゝの姿において見出さんと努められる結果、必然的に資本主義社會のより具體的な產物たる機械工業に眼をむけざるを得ず、かえつて簡單勞働と抽象的勞働の混同視におちいり、直接的生產過程内部における生産關係の主觀的理解をみちびいてゐることは先に見たとおりである。もちろん氏は實存規定のみをもつて充分であるとはされていなくて、更に第三の實現規定をもつて抽象的勞働の規定性を完成されるのであるが、ところがそこで實現條件として取りあげられるものは單純商品生産の諸條件にすぎず、それと實存規定としての機械工業との内的連繫は全く見失われている。それは商品分析にとつて従つて抽象的勞働の分析にとつて、具體的な資本主義の研究が如何に縁遠いかを實證しているにすぎない。

このように見てくるならば、氏が實存規定の資本主義的性格を強調されることによつて、かえつてその本質た

る資本主義的生産關係を見おとされる結果になつており、さらにそれは氏の實現規定における商品生産關係の理解の流通主義的でない、その原因ともなつているのである。従つて氏に對する批判はなお實現規定の検討を行わずしては充分ではないが、それが他の諸規定との關聯においてもつ意味は既に上述の批判で充分である。その他の點商品生産關係が抽象的勞働の成立の内的契機であるとされる點は、その限りでは既にローゼンベルグ(註十七)、宮川實氏(註十八)によつて基本的に與えられているものと一致してゐり、唯遊部氏の往々他人の誤解を引起しやす^い表現の不明瞭を除けばそのまゝ肯定し得るものであり、これ以上立入る必要はないであらう。

- 社(一) 資本論初版(宮川譯) 一一二頁
- 社(二) 經濟學批判(宮川譯) 二四頁(實存する existence は宮川氏の場合に「現實に存在する」と譯されてゐる)
- 社(三) 資本論(長谷部譯舊版) 第一卷第二分冊) 一三〇二頁
- 社(四) 經濟學批判(宮川譯) 二二頁
- 社(五) 資本論初版(宮川譯) 一六頁
- 社(六) 資本論(長谷部譯新版) 第一卷第一分冊) 七〇頁
- 社(七) 資本論(長谷部譯新版) 第一卷第一分冊) 二五六頁
- 社(八) 資本論(長谷部譯新版) 第一卷第一分冊) 二八一五七頁
- 社(九) 資本論(長谷部譯新版) 第三卷第八分冊) 四四頁
- 社(十) 資本論(長谷部譯新版) 第一卷第一分冊) 一七八頁
- 社(十一) 資本論(長谷部譯新版) 第一卷第一分冊) 一九九頁
- 社(十二) 資本論(長谷部譯新版) 第一卷第一分冊) 一九〇頁
- 社(十三) 經濟學批判(宮川譯) 二四頁
- 社(十四) 經濟學批判(宮川譯) 三一頁 三一三頁
- 社(十五) 資本論(長谷部譯新版) 第一卷第二分冊) 五〇頁
- 社(十六) 經濟評論 第三卷第十一號石渡貞雄「價值論の一斷片としての勞働の抽象的性格」參照
- 社(十七) ローゼンベルグ「資本論註解」 第一卷
- 社(十八) 宮川實「資本論研究」 第三號 九頁

抽象的勞働に關する若干の問題

第六十五卷

二八一 第四・五號

九五